

# SUNDAY NIKKEI

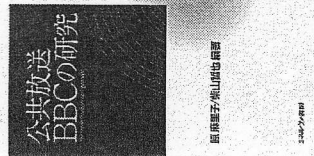
## 公共放送BBCの研究

原 麻里子・柴山 哲也編著

英国が世界に誇るものには3つあるそうだ。英語、オックスブリッジ(オックスフォード大学とケンブリッジ大学)、そして3つめが「BBCワールドサービス」。英国の公共放送であるBBC(英国放送協会)が世界に向けて情報を発信する国際放送である。

本書は題名の通り、世界の英語圏に影響を持つBBCについて日本人の学術やジャーナリストが様々な角度から解説した研究書だ。BBCに関する本は数多くあるが、編者が記しているように、日本語で書かれた総合的な研究書としては初の著作といえよう。

BBCは日本放送協会(NHK)の雛型でもあるが、実は2つの点で異なる。一つはかつての東インド会社のように国王から特許状という独占的な権限を与えられた組織であること。もう一つは「受信許可料」と呼ばれる国民の税的負担で運営されていることである。



(ミネルヴァ書房・4500円)

▼原氏は慶応大非常勤講師で社会人類学者。柴山氏は立命館大客員教授。

## 英国の報道機関の実像に迫る

このため報道機関としての中立性を貫くことが許され、イラク戦争報道を巡ってはアリア政権とも激しく対立した。イラクに対する武力行使のきっかけとなった大量破壊兵器の存在に疑問を投げかけ、BBC会長の辞任にまで発展した事件は記憶に新しい。

本書では戦争報道にも1章を割いており、最も興味深いくだりとなっている。日本では関東大震災や太平洋戦争からの復興手段としてラジオやテレビが発展した面が強いが、BBCは世界各地で起きた戦争や紛争を経て、その存在価値を増してきたともいえる。

遠いまさらに暮らさるなら、インターネットなど新技術への取り組みだ。日本の放送業界は電波による放送にこだわるが、BBCは情報伝達に有効な手段なら積極的に導入する義務を負っている。それはBBCの情報は国民のものであるという認識に基づく。放送済みの番組を1週間無料で見られるネットサービスはその典型だ。

本書は実際にBBCで働いた経験がある編者をはじめ、BBCに詳しい18人が執筆した。そのため重複した記述もあるが、逆に微妙な評価の違いが読み取れるところが興味深い。東日本大震災により公共放送のあり方が注目されている今こそ、一読の価値がある。

編集委員 関口和一